

書 評 と 紹 介

Andrew Gordon

Fabricating Consumers: The Sewing Machine in Modern Japan

評者：鈴木 淳

1950年代初めの日本の既婚女性が、一日2時間以上をミシンの使用を含めた針仕事にあてていたことへの驚きが、この研究の出発点である。

序章では、ミシンについてはマルクスが手工職人の賃金低下、さらには餓死、また若年女性の労働環境の悪化を招いたと機械工業化批判の例として取り上げた一方で、ガンジーが大量生産に対抗する村の自家生産手段として高く評価したような多様なとらえ方の可能性があり、また近年はシンガー製品の普及とそれを支えた販売体制を中心にアメリカ文化の世界標準化の象徴としても論じられていることを述べる。ついで、本書のねらいを次のように説明する。「日本へのミシンの導入と普及を追って、買う人と使う人を売る人と製造業者たちに結びつけ、また人々を商品自体に結びつけたさまざまな取引に、マスメディアや教育者の役割や、これらの取引が成立した背景にも注目しながら考察を加える。このような研究方法により、この小さな機械は、高貴な力のある人から、ごく普通の、あるいは力のない人まで多くの人々が経験した

近代史の基本的な様相を根拠を持って描き出すことを可能にする。家庭内での生産活動の手段としても、消費者の欲望の高嶺の花としても、様々な意味を持って、多数が用いられたミシンとその使われ方は、文化的な理想と社会構成の中での中流の登場と優越、そして女性消費者と日本の近代を特徴づける職業的主婦professional housewivesの登場をとらえる手段となる」（9頁）。

以下、本書は2部7章からなる。第1部「日本におけるシンガー」は、明治の機械、アメリカ式販売、近代的生活の販売と消費、アメリカ資本主義への抵抗の4章、第2部「戦争と平和の中で近代性を縫う」は、家庭における戦争機械、機械仕掛けの不死鳥、ドレスメーカーの国の3章である。各章の内容を簡単に紹介する。

第1章「明治の機械」 1858年のハリスによる将軍への献上品から1900年前後までのミシンの輸入と利用を概観する。当初ミシンは見世物になるほど関心を呼んだものの、和裁に適しているとは思われなかったため、洋服の裁縫機械として開港場の仕立屋や官営制服工場、東京の上流家庭などで利用されるに限られた。洋服は男性には用いられたが女性には普及せず、また日本では衣料の自家縫製が盛んで、欧米ではすでに一般化していた衣類生産の職業化が進んでいなかった。1900年に日本に進出したシンガーはミシンが和服にも使えると主張して売り込みを図った。

第2章「アメリカ式販売」 1851年に設立されたシンガー社は1880年までに世界市場の半分を押さえ、世界の文明化の前衛を自負しつつさらに市場占有率を上げ、日本でも1910年代までに家庭市場の8割を占めた。1920年代

おわりには8,000人を雇用する最大の外国企業であったが、西洋人は1ダース以下だった。男性の主任、販売員、集金人と女性の教師からなる小売店（分店）が全国に展開し、それを地域ごとの中央店が管理した。この直営店による、使い方の指導やその後の修理を含めた販売体制が、製品価格が競争相手より安価ではなかったシンガーの強みで、それはアメリカでの体制をそのまま持ち込んだものだった。日本進出からほどなく、帝大卒業後海外実業練習生としてアメリカのシンガーで学んだ秦敏之が日本での経営責任者となり、その妻で女子高等師範出身の利舞子がシンガーミシン裁縫女学校を経営して多くの女性教師や内職者を養成した。それは、女性の自立の道筋となったが、当初は日露戦争未亡人をはじめ、未亡人がその典型とされた。1907年からの月賦販売も含め、日本での販売は順調に伸びたが、ミシンの普及自体は1930年代半ばまではオスマン帝国やスリランカなどの中進国より遅れていた。ミシンが洋服用のものとして理解されたためであるが、シンガーも、より和服に適していた可能性があるチェーン・ステッチ式ミシンの投入や販売方法の工夫などの日本市場に向けた格別の配慮はしなかった。

第3章「近代的生活の販売と消費」 シンガーは20世紀の初期に日本における大量生産ブランド品販売の先駆的な地位を確立した。それは女性の服装を、また家庭やより広い経済における女性の地位を変化させることとつながっていた。その売り文句は女性の重荷の解消が国の進歩、日本の物質文明の前進をもたらすというものであり、和英両文で印刷された月賦契約書や製品自体、そして縫うことが想定された洋服も含め、アメリカの文化を感じさせた。当時の女性に求められた一家団欒を支える良妻賢母像自体が20世紀初頭の世界的な近代の特徴でもあった。婦人雑誌の掲載する「実話」や、各

種の出版物の検討からは、東京裁縫女学校の渡辺滋が、ミシンは怠慢の種で、国のためにはミシンを買うより国債を買った方が良いとしたような批判もあったものの、基本的にはミシンは節約と合理的な洋装の導入を両立させる手段や、望ましい内職手段として高い評価を得たことがわかる。

第4章「アメリカ資本主義への抵抗」は1932年の労働争議を扱う。金輸出再禁止後に輸入品であるシンガーミシンの売り上げは減少した。俸給受給者の俸給10%削減への抵抗は低賃金者の削減率を緩和するなどで妥協に至った。しかし、歩合給で、契約上月賦購入者の支払いが滞った場合や中途解約された際に会社に対して個人的に賠償する義務を負う一方で、解雇・退職手当がなかった販売員、集金人の雇用条件の改善を求めた運動に対してはシンガーは妥協せず、2,000人が営業を続けながら売り上げを会社に入金せずに供託する争議が三か月続いた。この過程で労働者側はアメリカ的経営を批判し、靖国神社に集団参拝するなど民族主義的な姿勢を示した。争議の結果、人材の移動もあってミシンを製造販売する国内企業が本格的な展開を始め、その後のシンガーの日本における業績回復は、朝鮮におけるそれと比べ小規模にとどまった。

第5章「家庭における戦争機械」 1920年代末のアメリカでは家庭電化が中流家庭の象徴であったのに対し、日本ではわずかにラジオとミシンの普及率が5%を超える程度であり、戦争への動員と生活の近代化の深まりが同時進行した。家庭での活用を主な目的とする洋裁学校が各地に教室を開き、アメリカないし西洋をモデルとしたファッションであるとともに合理性を追求した洋装の普及は、国民服やモンペの普及に変化して行くが、家庭での縫製は儉約や資源節約の観点からも推奨された。出征遺族のあ

りかたとも結びつけられてゆく収入獲得手段としてのミシンの宣伝は1943年まで盛んに行われた。ミシンの販売台数は1940年が頂点であったが、日本の女性の軍事工業への動員の浅さとあいまって家庭での長時間の裁縫が続いた。

第6章「機械仕掛けの不死鳥」 戦後、ミシン生産の復興は早く、1948年には戦前の最高生産台数を越え、その後も順調に伸びて1969年に頂点に達し、その7割が輸出された。広範な家内工業的な部品生産が展開したところがシンガーの生産方式と異なっていたが、これらの部品はシンガーの規格に準拠して作られていた。1950年代にシンガーは日本への再進出を図ったが、国内産業を保護しようという通産省による抵抗を受けたためもあって、1970年に市場の14%を占めるにとどまった。国内では多くのメーカーが存在したので、独立したミシン商が販売の主役であったが、主要メーカーである蛇の目はシンガーの再上陸への対応として1960年までに独立販売業者との縁を切ってシンガーと同様の直営店方式にし、ブラザーも部分的にそれにならい、街頭宣伝と戸別訪問を組み合わせた営業活動など、アメリカをモデルにしながら日本の条件にあわせて販売方法を発展させた。1920年代のアメリカでは女性が月賦により過剰な消費をすることが問題になったが、日本では女性の方が着実な返済が見込まれた。

第7章「ドレスメーカーの国」 1950年代の都市で既婚女性が1日3時間も裁縫を行ったことは、世界的にも類例がない。戦後の、素材は何であれアメリカのファッションを取り入れようという動きから、フランスでの流行の追求へと、家事と娯楽の両面で洋服の自家裁縫が盛んに行われた。戦後再開した洋裁学校は花嫁修行として多くの生徒を受け入れ、一部の生徒だけが職業コースに進んだ。このような自家生産

と小営業者の多さのゆえに、1960年にはアメリカでは注文服が既製服の4倍の価格だったのが、日本では1.3倍にしか過ぎなかった。当初は戦傷者や戦争未亡人がめだった内職者は、家庭の主婦を中心とするものとなり、新聞の略図から型紙を作るほどの技能を伴った自家用生産とあいまって、幅広い人々に「中流」の生活を可能にした。この点で、ミシンは階級の分裂より統合をもたらす機械であった。しかし1960年代からは既製服の進出と、家庭でのミシンの退蔵の傾向が現れ、1970年代には主婦は衣類の生産者であるより消費者へと変わった。

結論では、まず「ミシンと世界的な近代生活」として、最初の多国籍企業であるシンガーが普及させた最初の耐久消費財であるミシンが、世界のいたるところと同様に日本でも、アメリカをモデルとするセールスマンと合理的・近代的な消費者の誕生、そして主婦の力の強化をもたらしたとする。そして、日本の独自性として、中流上層の生活様式が月賦によるミシン購入や内職への併用によってより広い層に共有されて文化的な階級の統合をもたらしたことが、中流は自家用、労働者階級にとっては家庭の搾取工場化という欧米での伝統的理解とは異なるとする。しかし、近年の研究では、欧米でも同様な階級統合的な役割が評価されていることも指摘される。ついで「抵抗と近代の適合化」として、品質管理、洋服のデザイン、販売方法などがアメリカから日本に導入され、日本の条件の中で形をかえ、それが他の国に持ち込まれるという、グローバル化と地域化の相互関係を指摘する。さらに、日本型の近代の形成が、一つには争議でのアメリカ資本主義批判から日本型雇用慣行が明確化され、シンガーと競争するため日本の伝統にもあわせた販売体制が追求され、戦後にも戦時を思い起こさせる外国企業排斥によって国内企業が保護されるという、シンガーを意識

した形で進められたこと、そして欧米に見られない商業的裁縫学校の教育による職業的主婦の技能形成と既製服化が進まなかったゆえの裁縫時間の長さなどが、戦後20年以上にわたり、職業的主婦と自ら服を仕立てる消費者の国を現出したと結ばれる。付論として時間消費に関する調査の解説がある。

ミシンを基軸に、生活の近代化、訪問販売や月賦といった小売りの近代化、その中で西洋、なかんずくアメリカの影響とその受容のされかた、そして女性の生き方とそれをめぐる議論、そして変化といった20世紀日本の、他の手法では描くことができない、幅広い見取り図を描いた点で、成功した著書である。

周知のように経済史の研究では、生産に比べ流通、特に小売りの研究が遅れている。また生産でも紡績、製糸に比べ、織物、さらには染色が歴史的全体像を把握しにくく、今回の主題となった縫製でのミシンの利用や工場生産がどう進んだかは、まとまった研究成果がない。それは本書で指摘されたマルクスとガンジーのあざやかな見解の相違が示すように、簡単な発展段階として把握することができないためであろう。本書では、ミシンの普及率、そして既製服の一般化などの国際比較、一部では日本の植民地との比較を通じて、日本の状況が位置づけられる。本書のはじめには、多くの日本人研究者が、ミシンと母に関する思い出を持っていることが述べられる。幼時に隣家の洋裁学校を文字通り垣間見ていた筆者は戦後の洋裁ブームの叙述に思い当たるところが多かったが、そのような学校や、その教育の結果として家庭の女性が型紙を自製する能力を持っていたことが日本の特色であることは、本書での比較に立脚する指摘で初めて教えられた。

ミシンをめぐる研究は、Barbara Burman編 *The Culture of Sewing* (Berg 1999) など近年英

語圏で進んでおり、本書の背景にはそれらの成果もあるのだが、本書はその分析枠組みを日本に適用してみたというものではない。国内市場にもささえられつつ世界最大の生産国になったことが示すように日本の経済活動においてミシンはある時期重要な役割を果たしており、さらに、職業的主婦と呼べるほどの技能を持った主婦の誕生や総中流化という日本の女性のありようへの説明手段としてミシンが最適であるとの洞察に基づいた研究である。それは、英語圏でのミシンをめぐる社会史的研究を、ミシンの役割が非常に大きかった事例を加えることで画期的に前進させる意義を持っている。もちろん、日本の歴史研究においても、ほとんど未着手の分野に骨太な見取り図を提示した功績は大きい。

史料的には、新聞、雑誌が電子化されたものはもちろん、業界誌、社内誌まで使われており、著者が業績を重ねている労働争議の分野では、外務省記録や大原社研所蔵資料も含め、多角的な史料分析が行われている。また、女性の時間利用に関する調査も網羅的に検討しており、日本研究の経験が深い著者らしい、手堅い実証的叙述が続く。日本人研究者による生活史、社会史的研究より史料的な目配りが良い印象を受けるのは、著者の能力と人徳のなせるわざであろう。雑誌記事による女性のあり方や欧米文化の受容に関する議論の紹介は、上記の要約では伝えきれない豊かな内容を持っている。

英語で書かれているだけに、例えば日本における月賦販売の歴史、国民服とモンペの普及といった補足的な解説も充実している。後者では井上雅人『洋服と日本人』の内容がかなり丁寧に紹介されるが、その他では時代背景の説明も含め英語での業績が多く紹介され、英語圏での日本研究の現状を知る手掛かりともなる。

近年、谷本雅之氏らの近世以来の家族の就業

形態から農村部の産業発展を見直す研究の中で、家事への従事時間の再検討の必要が感じられて来ている。その点で、本書で指摘されている都市の裁縫の従事時間が農村より有意に長い、という事実をどう説明するかは重要な課題であろう。また、はじめて本格的な歴史叙述の対象となった歩合制のセールスマンたちが、どこから来て、どこへ行ったのか、その地位を労

働市場の中でどう位置付けるべきなのか、さらに職業的主婦の調理の技能や従事時間は国際的にいかなる特徴を持つかなど、本書に導かれる歴史研究の課題もまた多い。

(Andrew Gordon, *Fabricating Consumers: The Sewing Machine in Modern Japan*, University of California Press, 2012, 285 pages)

(すずき・じゅん 東京大学文学部教授)

〔法政大学大原社会問題研究所叢書〕

法政大学大原社会問題研究所／菅 富美枝 編著

成年後見制度の

新たなグランド・デザイン

人びとが保護の対象から自身の権利を行使する主体となるための支援とは何か。ケア、介護、消費、福祉などさまざまな現場と世界の最新状況から、成年後見制度を再構築する。予価5985円

法政大学大原社会問題研究所／原伸子 編著

福祉国家と家族

一九八〇年代以降に福祉国家が縮減する過程とグローバル化の下で家族政策が主流となっていく文脈を、米・英・独・スウェーデン・日本などの歴史的な事例を通して比較検証する。4725円

三井さよ・鈴木智之 編著

ケアのリアリティ

境界を問いなおす
〔現代社会研究叢書6〕

看護、介護、支援、援助、サポートなど、さまざまな現場でなされている「ケア」の営みから、そこに生じる諸問題や外部との境界を検証し、ケアのリアリティと可能性を探究する。3150円

三井さよ・鈴木智之 編

ケアとサポートの社会学

要介護高齢者、病者・障害者、生活保護受給者などを対象に、それを支える家族、職業的サービス提供者、ボランティアたちに共通する問題群を、社会学的見地から明らかにする。3465円

川越修・辻英史 編著

社会国家を生きる

〔サピエンティア03〕
二十世紀ドイツにおける
国家・共同性・個人

十九世紀末から現在に続くドイツ型福祉国家である社会国家の発展を、社会保障の対象とされる人びとの「包摂」と「排除」という往復運動のなかに見いだし、多角的に分析する。3780円

法政大学出版局

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-3-24
TEL 03-5214-5540/FAX 03-5214-5542

<http://www.h-up.com/>
※表示価格は税込みです